

緑爽会会報 No. 177

2021年12月23日発行

日本山岳会 緑爽会

發行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

《12月行事報告》 講演会「深田久弥 その人となりと魅力」

実施日：12月4日（土）14時～ 武蔵境のスカイルーム1にて

参加者：43名（緑爽会会員22名、その他の日本山岳会会員18名、一般参加者3名）

緑爽会会員に限らず会報「山」で告知し、オープンな形で開催している、秋の恒例行事となった講演会であるが、今回は準備に手間取り 1 2 月の開催となった。その速報的報告です。

今年は深田久弥が茅ヶ岳で急逝してから50年の年にあたり、山岳雑誌で特集が組まれた。4月の深田祭は没後50年と深田祭40回目の記念祭となり、前日に当会会員である深田久弥ご長男の深田森太郎氏が講演された。また『山岳』116年には、雁部貞夫氏が「深田久弥没後50年、果敢に人生を歩む」を執筆されている。そんな年であり、深田久弥をご存知のお二人にお話を伺い、改めて深田久弥の遺したものを知り、その人となりに触れることは意義のあることと思います。

会場は満員となり、講演会は定刻に富澤代表の挨拶で始まった。代表の講師紹介では横山厚夫さんと桜井昭吉さん共に以前に不思議な出会いがあったことが語られた。

まず横山さんから話していただいた。目の前にはお話に関連する本が沢山積み上げられている。

「三人が同じ誕生日」

冒頭、2012年1月の緑爽会会報（113号）を手に、「この会報の中で、司会の近藤緑さんが、深田久弥とご主人の近藤信行さんと、私（横山さん）の誕生日（3月11日）が同じだと話されています」と切り出された。2012年10月に大森久雄さん、藤本慶光さん、深田森太郎さんによる「深田久弥を語る」鼎談が催された記事である。

同じ誕生日だと判ったのは深田久弥が茅ヶ岳で亡くなった日の夜だった。横山さんご夫妻が近藤さんと北八ツから帰宅するとすぐに「深田さんが亡くなった」と隣に住む義母から知らせがあり仰天した。近藤さんに知らせるとやはり驚いていた。すぐに志げ子夫人に電話したところ、これから韮崎に行くというので、急遽一緒に行くことになったとのことだ。その時に志げ子夫人は「68歳になったばかりなのに」と話されたので、それはいつ？と尋ねて誕生日が同じと判明したのだそうだ。この北八ツからの帰りには、茅野駅前で食事をしたが、近藤さんが深田さんに寄せ書きしようと言って葉書に書いて投函した。韮崎にさしかかると左に茅ヶ岳がきれいに見え、いい山だと話したことを覚えている。





「深田さんとの出会い」

深田さんは『岳人』に「机上ヒマラヤ小話」を連載していたが、その1954年1月号（69号）の連載第5回目は「エヴェレスト文献」で、そこでは「ジョン・フィンチの『The Making of a Mountaineer』をまだ見たことがない」と書かれていた。当時学生だった横山さんは、学校へ行く途中の古本屋にそれがあることを知っていた。学生には高価な本だったが、母親に相談し、深田さん宛に「買ってお送りしましょうか」と手紙を出した。志げ子夫人の筆跡だったが、すぐ買って送ってほしいとの返事が届きそのようにされたという。代金は母親に借りたそうだ。追って“ヒマラヤ関係の本があれば知らせてほしい”とお礼のしるしの『わが山山』を添えて礼状が届いた。以降やり取りが続き、深田さんからの丁寧な手紙は44通に及んだ。これら手紙の本物は大聖寺の「深田久弥 山の文化館」に収められている。（手紙のコピーが入ったファイルが会場に回覧された）

「深田久弥のことが書かれていてびっくりした本」

深田さんのことを書いている人はたくさんいます。堀込静香編『人物書誌大系』（中馬敏隆さんとの共著とも言うべきもの）、ノンフィクション・ライター田澤卓也の『百名山の人』、北海道の高澤光雄さん、滝本幸夫さんなど。まじめに知りたい方は、一番深田さんのことがわかっている、ここに来られている高辻謙輔さんに聞いてくださいと前置きされて、話を続けられた。

1982年に『山と溪谷』で「日本百名山と深田久弥」という特集があり、その前年に故郷の荒島岳に登って文章を書いて欲しいとの依頼があった。天気が悪く、旅館で偶々持って行っていた青江舜二郎の『竹久夢二』を読んでいたら、深田さんの名前が出てきてビックリした。深田さんは女優グレン・タルボを称賛する詩を作っていたという。深田さんのふるさとの山、荒島岳に登るのにこんな名前が出てきたことがおかしくて笑い転げた。

フランス文学者の中島健蔵は日記体の自叙伝を書いているが、その中に深田さんの名前が18回も出て来る。1934年の2月には、文藝春秋の宴会で深田さんは芸者の首根っこを捕まえて東京音頭を踊ったとある。また居酒屋で井伏鱒二、永井龍男と飲んでいて永井が井伏にからんだ時に、何をしても良いんだとコップの水を永井の頭からぶっかけた、とある。

「ご自宅への訪問と深田さんの絶妙なお顔」

1955年8月に深田一家が東京に引っ越して来られた。深田さんは、東京は鼻持ちならず「東京嫌い」と書いてるのに、矛盾しているところがよくて、大好きになった。早速9月に呼ばれてご自宅を訪ね、志げ子夫人にもお会いした。まだ暑くビールが出されたが、酒は一滴も飲めないと話すと、ちょっとご不満そうな顔をなさった。

教科書会社の編集をしている時だったが、お宅へ行くと、諏訪多栄蔵さんがおみえで、さしつさされつの状況だった。諏訪多さんがトイレに行かれてなかなか戻ってこないの、心配された志げ子夫人が“あなたが飲みたいばかりに薦めるから諏訪多さんは気分を悪くされた”とたしなめると、深田さんはむにやむにやと絶妙なお顔をされた。

（編者注：この他たくさんの楽しい話をしていただきましたが、それはまた次号に続けます。）

続いて桜井昭吉さんが深田久弥を平ヶ岳、越後駒ヶ岳を案内された時の様子を、多くの素晴らしい写真を映しながら話された。

『日本百名山』の「平ヶ岳」で“小出山岳会のS君”と書かれている桜井さんは、先輩の伊倉剛三さんと一緒に登った。深田さんはすでに百名山にこの2座を入れるとリストアップしていて、そのための登山だった。当時ルートは無く、奥只見湖ができたので船で二岐川出合まで行き遡行した。(↓湖を渡る 左は藤島敏男氏)



山中2泊で8キロほどの沢を登り、源流からは藪漕ぎで、途中先輩が木に登って方向を確かめつつ進んだ。下りは

群馬側の水長沢を降りたが、戦争中にモリブデン採掘されていたので僅かに路があった。



「九山山房」名入れのテント（後方燧ヶ岳）

越後駒ヶ岳は枝折峠から中ノ岳、八海山と縦走した。私は駒ヶ岳のみの日帰りのつもりだったが先輩が三山縦走だよと言って後を任された。当時役場に勤めていたので、この日が日曜で困ったと思ったが、先輩は職場には話しておくと言って戻られた。11月で雪が結構あったが、中ノ岳手前で泊まり、翌日は祓川まで下降し痩せた岩尾根を登り、八海山ではまだ巻き道が無い時で、八つ峰の岩峰をすべて鎖・梯子などで上り下りした。もう一泊することもできたが自分は仕事のことも気になって、夜になったが一気に大崎口まで下った。



当時の駒の小屋（鐘の位置が今と逆）

未丈ヶ岳は海外登山研修会で、丸山までの組と未丈ヶ岳を目指す組とがあって、深田さんは丸山までの組だった。スキー登山だったが、私が先頭でラッセルした。30～50センチほどの新雪の中、誰も交代してくれず結局一人でやり通した。頂上までは行けなかった。海外のヒマラヤなどに行く人は、シェルパやポーターを使う。私はその役目をしたんだと思った。

「大聖寺にある江沼神社の文学碑の話」

未丈ヶ岳に登る前日に講演会を社務所の広間でやったが、その時深田さんに何か書いてもらおうと思ったが色紙が無く、神主がさらし布を持って来たのでそれに詩を書いてもらった。「山の茜を顧みて～」深田さんが亡くなった後、何かないかということになり、私が写真を撮っていたので、これが文学碑に使われることになった。山行では写真も撮れ、百名山のための登山としての目的は達成できたのかなと思う。

（山の写真は桜井氏提供、会場での写真は石塚さん撮影）

《10月行事》青空の下での「さがみこベリーガーデン」見学とBBQ

小林 敏博

私にとって緑爽会行事の参加はほぼ1年ぶりでした。JR 橋本駅改札口前で久しぶりに皆さんのお元気な笑顔と再会しました。山川さんには駅まで出迎えていただき、40分ほど揺られたバスを降りた三ヶ木バス停近くにあるスーパーで、車で参加する富澤代表と合流しました。飲み物などを積んだ車には山川さんのほか、2名が乗車して出発、ほかのメンバーは緩やかな起伏のある舗装道を徒歩でさがみこベリーガーデンへ向かいました。

歩いている間、富澤代表の車がピストンで2回戻ってこられてメンバーをピックアップ、ベリーガーデンに戻って行きました。残った荒井さん、夏原さん、横関さんと私4名は“健脚組”としてベリーガーデンまで歩くことにしました。やがて右手の緩斜面にソーラーパネルが見え、荒井さんが「あそこですが、下りる道はもう少し先です」との声にそのまま進むが、舗装道は大きく左に曲がるようになると、「行き過ぎたかな」との声に戻ることに。

600mほど余分に歩いて私たち最終組がベリーガーデンに到着。広い圃場には幾種類ものソーラーパネルが明るい緩斜面に設置されています。斜めに傾けたパネルの間からもれる陽光の下には抱えられないほどの大きな樽を半分に割ったような大きさの植木鉢が置かれていて、それぞれに1本ずつブルーベリーが植えられていました。先着組はすでに山川勇一郎社長のご案内でソーラーシェアリング(SS)の説明を受け、併せてガーデン内を見学されたようでしたが、改めて私たちもご案内いただきました。

ご説明いただいた内容は山川さんが詳しく記載されているので記しませんが、一つの種で収穫は2週間、33種を栽培することにより6月初めから9月初めまで収穫が可能とのこと。1000を超える植木鉢にはそれぞれ種名の名札が掲示され、1日に3回養液を与える養液ポット栽培方式のホースが設置されています。清潔感を感じる圃場の見学を終えてブルーベリー栽培に対する細やかな愛情を感じることができました。



説明される山川社長

抜けるような青空の下、圃場は朝の冷たい風も止んで暖かな陽光があふれていました。見学の間、スタッフの方々にはおこした炭を入れた真新しいコンロや、個別に食材を用意いただくなど



BBQの準備をすべて整えていただきました。

乾杯の後、ミニトマト串焼き、アスパラガスの丸焼き、豚肩ロースのたれ漬け焼き、相模原産紅はるかななどを、各人がそれぞれ大きな金網に載せて焼き堪能しました。青い空にはおいしそうな香りや油煙がそこそこで立ち上がっていました。焼き方を丁寧に教えていただいたにもかかわらず慣れないBBQなので焦げ過ぎてしまったものも。

最後は、甘みと酸味のバランスがとれた、相模湖産のフローズンブルーベリーがデザートとして供されました。久しぶりに皆さんと大いに飲み、ま

た皆さんとの会話を楽しみ、皆さんとの BBQ を味わいました。2 時間あまりがあつという間に過ぎてしまい、14 時頃、名残惜しくありましたが、現地で解散となりました。

山川さん、勇一郎社長をはじめスタッフの方々には大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

実施日：10月29日（金）

参加者：13名（写真左から）荒井正人、田井具世、相良泰子、島田稔、富澤克禮、横関邦子、松本恒廣、渡邊貞信、小林敏博、山川陽一、夏原寿一、渡部温子、山川勇一郎社長（平野紀子さんは先に帰られました）



夢をかたちにー さがみこファーム繁忙記 ー

山川 陽一

コロナ禍でいちどは延期になったさがみこベリーガーデン（SBG）見学会でしたが、これ以上ない秋晴れに恵まれた10月29日、緑爽会の皆さんをお迎えし、私たちの農園づくりの考え方の紹介と園内ツアー、その後は、降り注ぐ太陽の下での BBQ で楽しい一日を過ごすことができました。

遠方から泊りがけで参加いただいた平野紀子さんからは翌日こんな嬉しいお便りが届きました。「見事なソーラーとブルーベリーの共存、これは、近い将来、両立のモデルケースになると思います・・・さがみこファームの一步ずつの努力が必ず成功すると思います。社長勇一郎さん共々ががんばってください・・・」と。ご参加いただいた皆さんどうもありがとうございました。

以下、さがみこファームの設立から今日までの歩みを紹介させていただきます。

私は長年勤めてきた会社を 2000 年に退職した後、日本山岳会高尾の森づくりの会の立ち上げに関わり、自然保護委員会では、屋久島問題、ツールド谷川山岳マラソン問題、鹿嶺高原の大規模風力発電問題等々、多くの山岳環境問題に取り組んできました。

そして、2011 年 3 月 11 日、あの東日本大震災を契機に、地域で自然エネルギーを普及させなければという強い思いに駆られ、多摩地域を中心に屋根上ソーラー発電事業を展開、そして今回のソーラーシェアリング事業と活動を続けてきました。

「いい歳して山川がまた新しいこと始めたゾ」と言われそうですが、わたし的には終始一貫“自然環境の保護保全”という一本の線路の上を走り続けてきたと思っています。

かくいう私も、いつの間にか自分の限界が見える歳になってしまいました。今回のプロジェクトは多分私にとって最後のしごとになるでしょう。今はもう先頭に立って突き進むエネルギーはありませんが、裏方でプロジェクトを支え、何としても思いが形になるのをこの目で確かめたい、そんな一念でこの事業に取り組んでいます。

皆さん、ソーラーシェアリング（SS）ということばをご存じだと思いますが、農地の上部で太陽光発電をし、下部で農作物を栽培するハイブリッドな方式です。全国ではすでに 2600 件もの実例がありますが、ここ相模原市では私たちのサイトが初めてのケースになります。

3 年前、縁あって相模原市に適地が見つかり、2019 年（令和元年）5 月たまエンパワーの子会社として株式会社さがみこファームを設立（社長：山川勇一郎）し、本格的に SS 事業の取り組みが始まりました。

場所は津久井から山中湖に抜ける R413（道志道）沿いにあります。山間に小区画の農地が集積する典型的な中山間地の圃場です。かつては地元（青野原前戸地区）のひとたちが一家総出で農業を営み美しい里山の風景を形作ってきたと思いますが、時代の変遷とともに後継者不足で耕作放棄されて荒廃農地化してしまった場所です。そこを借り受けて再開拓し SS 事業を始めることに致しました。

SS 事業者の多くは農業で採算が取れなくても上のソーラー発電で得られる売電収入を合算して、トータルで採算が取ればそれでよしと考えているようですが、私たちはそうは考えませんでした。

上の発電事業でも下の農業でもそれぞれ独立した事業として採算が取れること、下でつくる作物は夢があるものにすること、単に $1 + 1 = 2$ ではなく持てる知恵を総動員してトータルで 3 にも 4 にもしたいと考えたのです。以下、私たちが考えてきたことを紹介させていただきます。



太陽光パネルと鉢の風景は美しい

■ ソーラーシェアリングの展示場にする

現在までに設置した発電設備は合計で 272kW（定格容量）で一般家庭約 80 軒分の電気使用量に相当します。上に取り付けた太陽光パネルは産業用の標準パネル、SS 専用の細型パネル、両面発電パネルの 3 種類です。これを今は電力固定価格買取制度（FIT）で全量売電していますが、先行き条件が揃えば地域に供給できるようにしたいと思っています。

更に、この冬には農業用ハウスを建てその隣に小規模の SS をつくり、そこで発電した電気をハウスで使用、余った電気を余剰売電する自家消費型のモデルにする予定です。できれば付帯設備として蓄電池を入れ、EV の充電も可能にしたいと思います。

これだけ多彩な SS 設備が一か所で見られるところは全国でも例がなく、立派な SS 展示場になると思います。

■ 栽培する作物はブルーベリー、作り方は養液ポット栽培方式で

どんな作物でも 100% 太陽が当たればいいというわけではなく植物には光飽和点というものがある。一定の光量があれば生育します。光飽和点は植物によって異なりますが、ブルーベリーは上に取り付けるパネル間に適度な隙間（遮光率約 40%）をあけてやれば十分育つことが実証されています。私たちはこのブルーベリーを地植えではなく最適な養分を最適なタイミングで最適な量を配管を通して自動的に流す養液ポット栽培という方式で育てることにしました。

この方式を選んだ理由は、農業経験が全く無い私たちでもできる工業的手法であることと、地植えより早く生育し大きな実になることが期待できる利点があるからです。

■ 会員制の観光農園として運営する

東京や横浜などから近いことや、R413 は山中湖に通じる観光道路で近隣にもキャンプ場などの観光施設が点在している地の利を生かして観光農園として運営し、来園者にゆっくりと SBG の場を楽しんでいただくため、会員制予約制で運営することになっています。

■ 生産農園機能も充実させ生産物はブランド化して販売する

現在植え付けたブルーベリーは 33 種 1100 本、数年後には観光農園の来客に摘み取ってもらうだけでは有り余る収穫が見込めるため、生産農園としての機能もしっかり確立し、単純に農協を通して売るのではなくブランド化して販売することを考えています。

■ ヘーゼルナッツ畑をつくる

ブルーベリーシーズンは 6 月から 8 月の 3 か月です。シーズンが終わった 9 月から収穫期を迎えるヘーゼルナッツの木を隣接地に植えました。実になるまで 3~4 年かかりますが、うまく育つことを願っています。

■ 各種イベントやワーケーションなどのフィールドとして通年利用する

SBG はソーラーパネルを全面的にはりめぐらせているわけではなく周囲の広い土地を青空空間として確保しています。ここをいろいろな形で通年利用することを考えています。

さてさて、どこまでできるかわかりませんが、中山間地で耕作放棄された荒廃農地でもやり方次第でどこまでできることを実証したい、ここに自然環境を壊さない新しい里山の風景をつくりたい、それを事業採算がシッカリ取れる形で実現したい、これが私たちの想いです。

山を越え谷を渡ってここまでやって来た以上、もうやるしかないでしょう。

来年 6 月には観光農園オープンです。皆さんの来園を心からお待ちしています。

（写真は会員の皆さんから提供いただきました）

《11月山行報告》

日原を散策する

石井 秀典

東京都の最西北端の集落、奥多摩町日原を訪れた。青空が広がり紅葉真っ盛りで散策には絶好日である。青梅線の奥多摩駅に集合。駅前から鍾乳洞行きバスに乗り、約25分の日原集落入口の東日原バス停で下車した。バス停前広場でミーティングを行い、本日の行程と日原集落がもつ歴史文化を案内担当の石井が説明する。

日原集落は、人口70人程の小さな山村で、現在は日原鍾乳洞の観光と奥多摩の登山口として賑う地である。しかし、この集落には往古より刻んできた多彩な歴史があり、今回の散策はその歴史文化を偲びながら、山深き山村を楽しんで歩くことにした。

中世時代から日原鍾乳洞は、一石山大権現と言われて大日如来を崇める修験道の聖地であり、多くの修験者達が険しい山道を歩いて訪れた歴史ある地である。戦国時代後半には、武州原島村（埼玉県熊谷市）から原島氏一族が県境尾根を越えて日原に移住し集落を構築した。原島一族は、一石山大権現（鍾乳洞）の繁栄に貢献し、集落に様々な文化をもたらした。江戸時代には、一石山大権現は上野東叡山寛永寺の所属になり、山深い山村に江戸や京都の文化が入ってきた。その一つが「白箸」作りだ。寛永寺貫主同行のお箸師が一石山のミズキの木で作った箸を貫主に御用されたことで幕府、武家、町人に広く伝わり、日原は箸割村と言われて全住民が箸作りに邁進した。また寛永寺の御所領であったことで郷土民芸3匹獅子舞の獅子頭水引には皇室ご紋章の十六の菊と五七の桐の紋が付けられ、現在も引き継がれている。終戦後には、青梅線が延伸されたこと等で日原の石灰石採掘産業が急激に動き出した。白箸作りは衰退して、集落内外には作業員住宅が建設されて人口も増大し、日原は鉾山の村へと様変わりした。その後、石灰石の採掘場所は天祖山へと移り行き、日原周辺の鉾山は閉鎖された。日原の人口は急減して、集落は再び静かな山村へと戻った。日原は波乱万丈の歴史をもった集落である。



梵天岩を背に左から、小清水敏昌、夏原寿一、富澤克禮、平野紀子
田井具世、辻橋明子、横関邦子、鳥橋祥子、小林敏博、竹中彰

集落の散策に出発した。集落の風景を見渡すと、家や畑は急斜面に石垣を積んで平地を作り存在している。日原集落は坂道が多いので散策には足下注意を促した。

東日原バス停から舗装の急坂を登ると、廃校の日原小学校に出会った。小さな2階建ての校舎と集落内で最も広い平坦地の校庭があり、懐かしさを感じる風景が見られた。小学校から急な石段を下り、日本唯一の巨樹情報センターの機能をもつ「日原森林館」に行く。全国の巨樹情報（幹回り300cm以上の樹木）が集められ、東京都は巨樹本数が全国一位であるとのこと。室内には奥多摩金袋山の巨樹ミズナラ（幹回り6.1m）の実物大レプリカが展示され、その大きさに圧倒された。レ

クチャールームで解説員から全国の巨樹写真等の説明を受けて森林館を退出。日原小学校の校庭で昼食を摂った。

午後からは日原集落の上の道を散策した。すぐに日原集落開拓者の原島一族が建立した「丹生神社」がある。武蔵七党武士団の丹党一族の祖先を祀った神社で、クリーム系朱色の社殿は日原の中心神社に相応しい。その先に鉄筋コンクリートの廃屋アパートが突然目に入る。無人の4階建てが2棟と低層建物が1棟あり、山深い山村の中では異様な風景だ。石灰石採掘最盛期に作業員住宅として建設されたアパートで、低層建物はスーパーマーケットとダンスホールであったとのこと。昭和期に隆盛を誇った鉾山の山村も無残な廃屋を残すことになり、歴史の惨さを感じた。人家が途絶え展望が開けて、日原のシンボル「稲村岩」が紅葉に彩られて目前に迫る。名前のとおり稲束の形をした尖った岩山で象徴的な風景である。再び急な石段を下って集落中央の車道に出る。少し寄り道して「万寿の水」を見学。集落の飲料水確保のために溪谷の対岸にホースを渡して水を引いた現役の手作り水道である。集落内散策を切り上げて鍾乳洞へと向かって歩き出す。鍾乳洞までは車道を約25分歩く。この道は明治時代まで一石山の参道で立派な杉並木と石仏が並んでいたという。一石山神社が見えて「日原鍾乳洞」入口に到着。まず鍾乳洞を見学する。日原鍾乳洞は関東地方最大級の規模をもち総延長1270m、気温は常時11℃。通路は整備されているが階段や梯子の登り下りが多く手強さも感じたが、参加メンバーは健脚で予定より早く見学終了して鍾乳洞を出た。対岸の「一石山神社」に行く。神社の創建は古くご神体は鍾乳洞であり、往時は荘厳を極めた社殿であったが小田原北条滅亡時の兵火で焼失。現在の小規模な社殿は昭和24年に再建されたもの。鍾乳洞北側に梵天岩等の奇岩が立ち並ぶ景勝地があり足を伸ばした。紅葉と奇岩との写真撮影を行って、本日の行程を終了した。乗車予定の鍾乳洞バス停に行くが、時間があるので紅葉の景色を見ながら東日原バス停まで歩き、バスに乗り込んで奥多摩駅に戻った。拝島駅で苦労さん会を実施して解散した。
(写真撮影：石井リーダー)

実施日：11月11日（木） 参加者：11名（前ページ写真参照）

（参考）行程記録

東日原バス停前広場(10:55)→旧日原小学校(11:05～11:10)→日原森林館(11:15～11:50)
→旧日原小学校昼食(11:55～12:30)→丹生神社(12:35～12:40)→廃屋アパート(12:45～12:50)→稲村岩眺望地(12:55～13:00)～万寿の水(13:05～13:10)→日原鍾乳洞(13:40～14:25)→一石山神社(14:30～14:40)→奇岩景勝地(14:45～15:00)→鍾乳洞バス停(15:05)→東日原バス停(15:35)

初めて緑爽会行事に参加して

竹中 彰

緊急事態宣言が明けて一か月余、緑爽会入会后初めての行事参加の機会を得た。

早めに奥多摩駅に着き、久しぶりに駅前の観光案内所で日原周辺の資料などを物色、バス停1番は土日の喧騒がウソのように並ぶ人もなく、行き先案内板に来年3月中旬まで川乗谷通行禁止の告知が貼られていた。定刻までに一行11名が揃い、ほぼ満員状態のバスで出発し、25分で東日原BSに到着。その場で自己紹介、挨拶とこの日のガイド石井さんから行程概要の説明を聞く。

スタートして直ぐに街道を離れて日原集落の間の坂を上がって旧日原小学校の校庭に出る。日原川と山との間の狭い斜面に石垣を組んで平地を生み出している集落を見下ろして一息入れる。

次いで校庭直下の立派な木造建築の「森林館」を訪ね、奥多摩の動植物展示見学と講演室で高橋館員から我が国の巨樹巨木に関する説明を聞く。奥多摩町内には全国で確認されている64千本余の巨樹のうち891本が存在し、日本一の巨樹の里とのこと。展示には鳥獣の剥製、樹木標本（当時

全国 2 位の金袋山のミズナラ実物大レプリカ)、著名な巨木の胴回りを実物大でフロアに色分け表示などその大きさを実感させる工夫があった。更に高橋館員の説明では、余り聞きなれないレイライン(LEYLINE)の解説に熱が入っていた。帰宅後ウィキペディアで確認すると「古代の遺跡には直線的に並ぶように建造されたものがある」との仮説で、1921年に英国のアマチュア考古学研究家 Alfred Watkins によって提唱されたとある。ケースには古代イギリスの巨石遺跡群が示されている。我が国の例示としては【伊勢神宮－富士山－鹿島神宮、途中に皇居、スカイツリーが存在】、【出雲大社－大山－竹生島－七面山－富士山－寒川神社－上総一ノ宮・玉前神社、春分・秋分時の黄道に重なる】など色々の線が引けるとのこと。パワースポットと関連付けてスピリチュアルに関心のある向きには興味深い説であろう。森林館を辞して校庭に戻り、四囲の山の秋色を愛でつつ昼食をとる。

食後に近くに聳える稲村岩（下の写真：写真はいずれも竹中さん提供）を左手に見て日原街道を進み、小川谷橋を渡った三叉路を右に小川谷沿いに折れると程なく前方に燕岩の石灰岩の絶壁が頭上を覆う日原鍾乳洞入口に到着した。

洞内は年間平均気温 11 度とのことなので、一枚着込んで入洞する。入口の少し先で通路が狭まり、天井も低くなっているが、照明が暗く曇った眼鏡越しに足元に注意を向けていると天井の岩に頭を 3 回ほどぶつけて痛い思いをする。要素には赤、緑、紫色の LED ライトで壁面を照らしているが、総じて暗い印象を受ける。秋芳洞などの鍾乳洞は白っぽい鍾乳石のイメージだがこちらは全体に黒っぽい岩で期待との差に違和感を覚える。これはここが鎌倉時代以降に修験道の聖地として信仰の対象として利用され、往時の松明の煤煙に依るものとのことであり、洞内には観音、地獄、地蔵、賽の河原、三途の川等と名付けられた石筍、鍾乳石が点在する。また、昭和 37 年に発見された新洞部分は高低差が大きく、殆どが急な階段の登降となり息も上がる見学であった。

小一時間の見学後、少し上流の「日原燕岩洞門」を越えた地点で、対岸の石灰岩が長年の浸食、部分崩壊で不安定なローソク状に残る「梵天岩」の姿を観察した。丁度逆光で紅葉が赤く映えていた。「一石山神社」に立ち寄り後、最寄りの日原鍾乳洞 BS ではかなり待たされることが判明し陽も傾き寒さを感じ始めたため、東日原 BS まで歩くこととした。街道脇の広葉樹、周囲の山々の黄葉を鑑賞しながら歓談しながら進み、中日原集落では明治 41 年から日原川対岸の沢(水源)からパイプで引き込む「万寿の水」を見学し、なお 30 分ほどの余裕をもってバス停に到着した。帰路の車中で拝島での反省会が提案され、7 名が「庄や」に繰り込み懇談した。

初めての緑爽会行事参加であったが、快晴の下で紅葉・黄葉進む奥多摩で適度のウォーキングを交え、日原鍾乳洞見学や森林館での巨木の興味深い解説等有意義な一日を過ごせた。富澤代表始めガイド役の石井さん、ご参加の皆さまお世話になりました。今後も宜しくお願い致します。



「山の俳句」 思い出すこと

小原 茂延

「緑爽会会報」8月号に荒井さんが「ようこそルームへ」欄で俳句のことについて書かれている。田淵行男夫人の日出子さんが大野林火の「濱」の同人で、荒井さんの父君も同人であったので面識があったやも知れぬとのこと、同人となれば句会や鍛錬会に出席することが多いので十分考えられることと思う。

【大野林火】

大野林火の句は一句だけ覚えがある。山本健吉の「定本 現代俳句」だったかと繙くが収載されていない。「名句鑑賞辞典」(学習研究社)にあって記憶していた句は「ねむりても旅の花火の胸にひらく」愛知県豊川市での作とあり、林火の叙情性が遺憾なく発揮された句との評がある。

大野林火は明治37年横浜市日の出町生まれで本名は正(まさし)。臼田亜浪門、昭和21年に「濱」を創刊、主宰した。若い時分に山の俳句で知られる前田普羅の句会に出席している。蛇笏賞も受賞、俳句評論でも知られた。師系は河東碧梧桐であるから高浜虚子とは系統を異にしている自由律の俳人が多い。昭和19年に「高浜虚子」を上梓、「ホトトギス」外の者の手になる初の本格的虚子論で、その中正なる識見と史眼の深さによって、林火の俳句評論家としての地位を不動にすると共に多くの後進に影響を与えたという。とりわけ村越化石を見出した功績は大きい。16歳でハンセン病となって草津温泉に近い療養施設にいた村越化石の俳句を指導し、蛇笏賞を獲るまでに指導した。(名句鑑賞辞典参考)

【福田蓼汀・岡田日郎】

緑爽会に入った翌年の新年山行は柴又七福神詣でに初参加したが、そこでお会いしたNさんが岡田日郎が現在主宰する「山火」の同人であったのに吃驚(その後退会)。かつて私も短い期間参加したことがあった。私の場合は同人どころか、ただ毎月「山火」に投句してただけで、句会などに馴染めず、吟行は山行の折と考えていた不真面目な会員であった。「山火」で知った同人らの消息をNさんからお聴きして懐かしかった。

「山火」をはじめに主宰したのは福田蓼汀という高浜虚子に師事した人で、長州萩に明治38年出生。日露戦争で日本が戦勝し、乃木希典がロシアのステッセル軍司令官と水師營で会見した際に副官として同席した福田彦助参謀(中将)の長男である。福田蓼汀は登山を好み、弟子の岡田日郎とも山行を多くしていた。その蓼汀の次男善明が昭和44年8月に奥黒部で同行の岡部浩子と共に鉄砲水もしくは山崩れにより、黒部湖に押し流され、または土砂に埋没するといった惨事が発生した。捜索は何年も続けられたが遺体も見つからず、すべては空しかったという。

その後思わぬ関連情報に驚いた。緑爽会の大先輩である山口節子さんがこの遭難を会報で報じ、遭難された女性が岡部浩子会員(団体会員番号5810 遭難当時26歳)であり、福田氏と同じ三菱商事の社員であった由で情報提供を呼び掛けていた。(会報292号) また、「山岳」第65年の追悼にも山口節子さんが追悼文を書かれていることを知った。

当時発表した「秋風挽歌」三十句によって第4回蛇笏賞を受賞したが、運命の非情さを感じざるを得ない。

(福田蓼汀の世界 岡田日郎編著参考)

秋雲一片遺されし父何を為さん 蓼汀

編集者余話〈その5（最終回）〉

南川 金一

編集に関係する事柄として、活版印刷や誤植のことを書いてきた。活版印刷は博物館へでも行かなければ見ることはできないから、いまさらその仕組みを説明してみたところで始まらない。だが、少し古い印刷物は活版印刷であり、活版特有の誤りである誤植がある。長く編集者をやってきて、印刷物に誤植が見つかった時には、その原因を考えるのが習性になっている。他人のミスに揚げ足を取るつもりはないが、なぜそうなったのかを考えて、自分のミスを避けるための教訓とすべきだと考えるからである。印刷物の誤りは印刷の方式によって性格が異なる。活版の時代は活字を拾って組んでいたから誤植だった。その後は写真植字（写植）の時代があり、最近ではパソコンで原稿を作り、コンピューターで処理するから、主な誤りは変換ミスである。印刷方式が変わっても、「誤植」はミスプリントを指す言葉として使われている。

『山岳』や会報には結構ミスが多い。その理由として考えられるのは、歴代の編集者に専業で編集に携わった人は一人もいないのである。本業があり、余業として『山岳』や会報の編集に携わったのである。人間は全能ではないから本業も余業も同時に 100 分の集中力を注ぐことはできない。本業が忙しくなると、余業にまでも注意力を集中していられなくなるし、逆もまた真なのである。

「誤植」 幾つかのケース

『山岳』第 29 年第 2 号（昭和 9 年発行）の中野山堂著「北アルプスの紅葉風景（笠谷・笠ヶ岳・下佐谷及び其他の諸谷）」は、笠谷から笠ヶ岳に登り、笠ヶ岳西方のタケゾリ辻（2417.5 ㍎三角点のあるピーク、点名「竹造」）を経て北西尾根を下り、弓折谷へと下った珍しい記録である。点名「竹造」について書いた紀行文はこれが唯一といってよいものであり、私は注目してこの記事を読んだ。文中に、「（笠ヶ岳西方の）鞍部から…垂直五百米以上ある頂上は二千五百米余のタケゾリ辻…」とある。しかし、地形図を見ても 500 ㍎も登り返すようなピークは見当たらない。「五百米」は「五十米」の誤植であり「二千五百米余」は「二千四百米余」の誤植である。なぜそのような誤植が起きるのかといえば、活版では活字棚に「一」から「九」までの漢数字が並び、その隣に「十」「百」「千」「万」の単位を示す活字が置いてあり、文選工が「四」のつもりで「五」を拾い、「十」のつもりで「百」を拾ったのである。隣の活字を拾ってしまうことはよくあることで、それを正すのは編集者の仕事であり、原稿と照らし合わせをすればよいのだが、つい手を抜いてしまう。方向を示す「東」「西」「南」「北」も隣り合わせに活字棚に置かれてあり、これも拾い間違いがよくあって、編集者泣かせだった。



左は笠ヶ岳。右の白い小さな山がタケゾリ辻
（黒部五郎岳南西尾根から写す）

これは古い会報の誤植である。会報 No. 1 ～100 の合本を見ていたら、No.79 の記事に執筆者名が「茨木猫之吉」とあった。茨木猪之吉を知っていれば、その誤植だと気づくから“愛嬌”で済まされる性質のものではあるが、訂正は必要であろう。しかし、次の号を見てもお詫び・訂正の記事

はない。活字棚の活字は同じ「へん」や「つくり」の活字を画数順に並べてあり、「猪」も「猫」も豕（けものへん）の8画であり、文選工が隣の字を拾ったのである。その次の No.80 のトップは日本山岳画協会所属の画家の絵の批評記事である。記事の冒頭に「染木照」の画家名が登場するがそれは間違いで、正しくは「染木煦」である。染木煦を知っている読者は少ないであろうし、「染木照」を見て染木煦の誤植だと気づく会員はもっと少ないはずであるが、これについても次号に訂正記事は見当たらない。「煦」も「照」も灬（れんが）の9画であり、これも文選工の拾い間違いである。文中では触れていないが、洋画家・染木煦は山岳会設立発起人の一人・河田黙の弟である。河田家では、黙の親の兄弟と黙の兄弟の名前はすべて灬（れんが）の字で、「黙」を「しずか」と読むように、読みを字義からとっている。黙の親の兄弟は上から熙、燾、熙、悉、休で、休の息子が上から烈、黙、杰、煦、黨である。これについては、いずれどこかに書いてみたい。

これは印刷屋の変換ミスに危うい思いをしたケースである。『山岳』第89年（1994年）の追悼欄に島田巽氏（名誉会員）の追悼文を掲載した。島田氏は朝日新聞の論説委員だった人で、戦後初の欧州特派員として英国へ赴任し、欧州文化やヒマラヤ登山に関係する優れた著作がある。追悼文の執筆を依頼した^{くつわだ}轡田隆史氏も朝日新聞の論説委員になった人で、島田氏の20年後のロンドン勤務時を回想して、「先輩のよく行かれたのと同じスペイン料理屋に行き、ハムレットを観劇なさったのと同じ所で、それを見た」と、万年筆書きの原稿にあった。ところが、この原稿のゲラ刷りには「ハムレットを感激なさった…」とあり、その変換ミスには私も気付かなかった。山岳会図書室の田村典子さんがゲラに目を通して、何となく違和感を覚えて原稿に当たってくれたお陰で誤りが判明したのだった。朝日新聞の論説委員が書いた原稿でミス…と考ええると、冷や汗ものだった。読み合わせをしても発見が難しい性質の誤植であり、編集者にとってはつらいものがある。

国土地理院が発行する地形図にも誤植があった。手持ちの5万図「赤穂」（平成元年発行）、2万5千図「空木岳」（昭和63年発行）に「赤榔岳」とあり、「あかなぎだけ」と振り仮名がある。これは「赤榔岳」の誤植である。中央アルプス主稜線上の山であり、ガイドブックまでもが間違った山名を使っていた。現在の版では修正されている。標高が誤植されていたケースもあった。原因は、写植の打ち間違いと校正時の見落としであろう。

今年春ころの新聞に、〈政府が国会に提出した法案の参考資料に何か所も誤りがあり、「地縁」を「地緑」としている間違いも〉、との記事があった。この誤りの原因はパソコンの変換ミスとは考え難い。どこかの論文を、パソコンで打ち直すのは面倒なので、OCRでワード化した文章の校正ミスであろう。OCR（Optical Character Reader＝光学式文字読み取り装置）については、本紙 No.148 の「武田久吉のこと」にも書いた。平凡社が武田久吉の『明治の山旅』を再版するに当たり、創文社版をOCRでテキストデータ化したものが、編集者が変換ミスに気付かず「燧ヶ岳」が「燧ヶ岳」となってしまったのだろう、と書いた。OCRを使ってみれば分かることで、「地縁」を「地緑」と認識してしまうことはほぼ想定されることであり、それくらいは承知して校正に気を付けなければならないのである。印刷された文章を読み取ってテキストデータ化するOCRは画期的な機能だが、万能ではない。デジタル庁設置に関する説明資料のミスだというのが、デジタル化の便利さに溺れると、こんな基本的なところの感性さえもが鈍化してしまうようだ。

日野春アルプ美術館での「山の絵」展のこと

中村 好至恵

先の十月中旬には緑爽会の企画・日野春アルプ美術館の「山の絵」展にて久しぶりに会員の方々とお目にかかることが出来ました。ご参加くださった皆様、企画・お世話役の荒井会員に心より御礼申し上げます。また前号の会報にもご来館から日数も間もない中、数々の原稿をお寄せ頂き、とてもありがたく、また嬉しく拝読致しました。どうもありがとうございます。ここでは改めて私と日野春アルプ美術館との出会いから、今回で6回目となる「山の絵」展のことなどを少し書き記したいと思います。

2005年の晩夏に初回の個展を開き、以来3年ごとの開催、去年はコロナ禍で一年延期したものの今回が6回目、この美術館とのお付き合いは常設展示も含め、あしかけ20年ほどとなります。日野春アルプ美術館との出会いは、甲斐大泉で当時まだ開業間もなかったペンション「ロッジ山旅」への宿泊が縁でした。当時発行されたばかりの白山書房季刊誌『山の本』に、ロッジ・オーナー長沢 洋さんの文が掲載されていることから、その読者だった私は空き室の問い合わせをしました。ちょうど夏休みの山行計画が悪天候でダメになり、かと言って下界の宿はどこも満室で困っていたのです。幸運にもロッジ山旅に宿泊できましたが、しかし雨では身動き取れず、そこで紹介してもらったのが日野春アルプ美術館でした。あの年の夏山が好天であつたら、ロッジ山旅・日野春アルプ美術館との出会いは何時のことになっていたことでしょう。

初めて訪れた日野春アルプ美術館では、世の中にこんな場所があつたのか…といった静かな感動で満たされました。階下の坂本直行の豊かな作品群をはじめ、畦地梅太郎や大谷一良の版画作品など、山小屋風の木造の館内を上がると二階の会場には常設で山の絵コレクションが美しく展示されていました。また絵画のみならず、日野春アルプ美術館の真骨頂はその山岳関係の蔵書でもあります。加え音楽のコレクションも豊かで、これらが相まって、当地の文化的発信拠点としていぶし銀のように存在していました。



その美術館を維持管理されているのが鈴木伸介さんで、見事な整理整頓での展示にとどまらず、居心地のいい落ち着いた空間を、調度品やドライフラワー、木の置物など、八ヶ岳南麓の雰囲気に対応しく創り出しているのです。すっかりその空間が気に入って何度か足を運ぶ内に、館長鈴木さんから企画展で個展を開いたら〜とお声をかけて頂き、以来こうして20年にわたるお付き合いとなったのです。

その日野春アルプ美術館も、近い将来閉館の予定であると聞いたのは、前回の企画展を終えた頃でした。始めはさほど真剣に受け止めていませんでしたが、そのうち足を運ぶ度に、館内がだんだ

んコザッパリと片付いていくのを目にし、本当なんだ…と感じました。そして決定的な話を鈴木さんから伺ったのが、山の文芸誌『アルプ』が創刊から300号、25年で終刊したのと同じに、この美術館を造った当初から25年で閉館することを決めていた、という内容でした。これには本当に驚きました、そもそもがそうしたお考えだったとは…。

それで今回の「山の絵」展が企画展では最後のようにあり、残りの数年で館長の鈴木さんは持ち前の“片付けパワー”で美術館の“仕舞い”を進めて行くようなのです。長いような短いようなお付き合いのなかで、私は最も多く日野春アルプ美術館で個展を開催させてもらい、常設でもお世話になりました。山の絵を描く絵描きとして、これ以上の幸せがあるでしょうか。そんな記念的な展示を緑爽会の皆さまにもご高覧頂け、本当に嬉しく思いましたし、ロッジ山旅では久々の楽しい談笑のひとつときを持つこともでき、重ねて感謝の気持ちをここで申し上げる次第です。どうもありがとうございました。

南会津山の会『続 いろりばた』～山岳第99年「図書紹介」

吉田 理一

日本山岳会の機関誌「山岳第99年」は2004年12月に発行された。編集委員は担当理事の芳賀孝郎氏(JAC 副会長)他6名である。6名の中の3名は南川金一・宮下啓三・関塚貞亨の3氏で緑爽会ゆかりの方々がそれぞれの編集分野を担当されている。関塚貞亨氏の担当は図書紹介であった。

私の緑爽会入会は2004年4月である。その年の7月の暑気払いで関塚氏から南会津山の会の『続いろりばた』の図書紹介を依頼された。

「山岳」の図書紹介は著名なジャーナリストや山岳関係図書出版の編集担当歴任者・山に関する著作物の豊富な執筆者が殆どである。私のように山の書物など一冊も書いていない無名な一地方会員の出る幕ではない。



『いろりばた』特装限定本

更に知らないというものは怖いものである、山岳第99年が刊行された後に聞こえてきた話である。南会津山の会といえば望月達夫・川崎精雄両名誉会員をはじめとして錚々たるメンバーが所属していて、その機関誌「いろりばた」に載せられている山の紀行文は岳界では高く評価されていたのである。「望月さんや川崎さんの紀行文の書評など私にはとても書けません」と何人かから断られたとのことである。そのような情報を事前に知っていれば当然「私などにはとても・・・」と辞退していたはずである。思い起こせばまさしく背筋の寒くなるような話である。

私が指名された理由は「会津と越後は近いから。1972年刊行の『いろりばた(正)』の特装限定本(158部発行)や『続 いろりばた』の100部特装限定本を所蔵しているから」とかだったように記憶している。今振り返ると随分あやふやな理由からである。

『続 いろりばた』の図書紹介は次の書き出しで始まっている。

〈会報『山』第 329 号(1972 年 11 月)の図書紹介欄に『いろりばた』が紹介されている。紹介の文を執筆されたのは藤島敏男氏である。この中で藤島氏は「地面に足のついていない背伸び遠征などに、気を取られないで《いろりばた》の続編にじみな努力を望みたい」と述べられている。その続編が 32 年ぶりに刊行された。〉

2004 年 12 月『続 いろりばた』編集者の山田哲郎氏(7384 番)から封書が届いた。山田氏とは面識は無い。山岳第 99 年はすでに活字になって刊行されている。何を抗議されようがクレームをつけられようが後の祭りである、腹を括って封書を開封した。

手紙の要旨「30 年も前の会報「山」第 329 号に掲載されている『いろりばた』の藤島敏男氏による書評まで引用されて頭の下がる思いです/図書紹介に関塚貞亨さんが吉田理一さんを選んだのは慧眼であると思います/この図書紹介には私たちが言いたいことが全て書かれています/嬉しくな

って日本山岳会会員以外の南会津山の会の会員にコピーを送ったところです」
30 年前の会報「山」からの記事を引用していることなどから、山田氏は私を越後支部の長老か少なくとも自分よりは年上と推測されて、失礼の無いような配慮が感じられる丁寧な手紙の内容だった。

山田氏の年齢は同氏と横山厚夫氏との共著『青空と輝く残雪の山々』(1987 年 3 月刊・茗溪堂)の著者紹介によれば 1929(昭和 4)年のお生まれであり、私のほうが 20 才近く年下である。

緑爽会 2008 年 10 月例会は『静かなる山』(1978 年 7 月刊・茗溪堂)をテーマに、執筆者である中西章・横山厚夫・山田哲郎の 3 氏を招いての座談会であった。その会場で関塚貞亨氏が私を山田哲郎氏に紹介してくださった。そこでは図書紹介についてのお話をする機会は無かった。

何時だったかの緑爽会例会で小倉厚氏から「図書紹介に執筆していましたね」とお声がけいただいたが、小倉氏からの論評は無かった。関塚氏からは「好評です」のコメントをいただいた。

南会津山の会は『続 いろりばた』の書評が掲載されている誌面を特集した「いろりばた通信」臨時増刊第 27 号を発行した。2005 年 2 月 1 日刊行、編集人～野口冬人・誌面収集～山田哲郎。
(編者注：上記をベースに出版社など補足した)

書評掲載誌	発行年月	出版社	執筆者
山の本	2004 年 夏号	白山書房	田中 直彦
新ハイキング No.584	2004 年 6 月号	新ハイキング社	祖父川 精司
岳人 No.685	2004 年 7 月号	東京新聞	記名無し
会報「山」 No.715	2004 年 12 月号	日本山岳会	松家 晋
山岳 第 99 年	2004 年	日本山岳会	吉田 理一

2008 年 10 月山田氏から南会津山の会「創立 50 周年記念誌」と記念品が送られてきた。
山の書物の研究をライフワークにしている私にとって忘れられない思い出である。

マルレ（連絡艇）船舶特攻艇の真実

関塚 貞亨

8月9日NHK衛星放送で取り上げられた「マルレ（船舶特攻艇）の真実」は中途半端で、船舶特攻艇隊員として鹿児島市郊外の谷山漁港で敗戦を迎えた私としては、不満の残る内容であった。

放送では、特攻艇の構造について4ミリのベニヤ板製というほか、艇の写真だけで説明がない。特攻艇の構造は船底が8ミリ、側板6ミリ、甲板4ミリのベニヤ板製で、前方にトヨタか日産の6気筒トラック・エンジンを積むが、トランスミッションはなく、クラッチとアクセルだけで冷却は海水による。6気筒の排気管にはサイレンサーがなくオートバイ以上の轟音を立てながら走るから隠密行動は無理である。速力は17ノットとされたが実働は15ノット程度であったろう。

攻撃目標は速力の早い軍艦は対象外で、アメリカが戦時中大量に建造した5000重量トン級のリバティ型が上陸地点の沖合で停泊して、兵員と上陸用舟艇を下すときを狙って攻撃する。船底7メートルで爆発するようにセットした爆雷2発を落とし、反転して脱出する計画であった。

そのため最初の訓練では目標の船に向かって45度の角度で突っ込み、船腹1メートル手前で反転、足踏み板を踏んで爆雷を投下し脱出するという計画であったが、陸軍首脳部は攻撃する目標の手前で爆雷を落とされ無駄になるのを恐れたのであろう、特攻艇の船首側板にT字型の突起をセット、目標の船腹にぶつからないと爆雷が落ちないように改造された。船腹にぶつかったら反転は困難で、完全に特攻艇となったのである。

次に連絡艇という命名である。海軍にも同じ特攻艇があったが、国のために命を投げ出す勇士に敬意を表して「震洋」と命名している。ところが陸軍参謀部は秘密を優先して連絡艇と解釈不明の命名をしている。陸軍上層部にとって兵士は勝利のための単なる駒という思考を証明しているのである。

日本軍は真珠湾攻撃のように奇襲では成功するが、次のウェイク島攻撃で大敗したように、米軍が準備している場合は成功しない。船舶特攻艇の場合も、米軍の比島レイテ上陸作戦の最初ときは特攻艇の奇襲でリバティ4隻を沈めたと聞いている。NHKの放送では16隻とされているが、最初の奇襲攻撃での成功であろう。

次の攻撃では、米軍は潜水艦防御用の網を張り、内側で上陸用舟艇を下ろし外側を快速艇が警戒、機銃で特攻艇の爆雷を狙い撃ちするという作戦で、攻撃はすべて不成功に終わったと聞いている。

私の船舶特攻艇体験記

体験記を語るには、戦争末期の日本軍の事情と私の軍隊体験記から述べる必要がある。

昭和19（1944）年から兵役年齢が1歳繰り上がって19歳となったことで、私にも9月4日に石巻の暁部隊に入隊するという召集令状が来た。入隊してすぐに「お前たちは南方へ行く」と告げられ、列車で東北線、東海道線と無停車で走り続け、故郷の横浜も過ぎて京都まで来たときに、予定していたフィリピンのセブ島で初年兵教育をするための船が潜水艦に沈められて無くなった。そのため徳島の小松島の小学校が臨時兵舎となって、私たち新兵100人2小隊が講堂で雑魚寝することになった。

講堂の板の間に毛布2枚で寒いし、乏しい食事で過酷な訓練の3か月の初年兵生活での一番の思い出は、着いた早々の軍医による身体検査で血沈21ミリと告げられ、従来なら即日帰郷扱いだが、保護兵として週2回牛乳2本が支給されることに決まったことだ。しかし最初の一本を飲んだだけ

で2本目以降は無かった。後でわかったのだが、講堂にある演壇の控室で6人の下士官が週2回ミルクティーにして私の牛乳を飲んでいたのである。初年兵生活では上官として下士官6人と学徒動員された見習士官2名が小隊長としていたが、その時の内務班では幹部候補生上がりの見習士官より下士官のほうが気楽な生活を送っていたのである。

私の3か月に及ぶ初年兵生活は終わり、10人に一人という狭き門の幹部候補生に奇跡のように合格し、小隊の3人が和歌山で集合教育を受けることになった。紀ノ川近くの東洋紡績の宿舎が臨時兵舎となり、訓練は苛酷で苦しいだけであつた。4月に訓練が終わり、私は乙種となって少しは楽な生活に入れると思ったが、当てが外れて、5月に「連絡艇要員を命ず」と辞令が下り、広島に向けて出発し、海軍兵学校の反対側の江田島の訓練基地に到着し特攻艇の訓練が始まった。

私たちの特攻艇部隊は士官学校出身の大尉が戦隊長、学徒出身の見習士官6人が小隊長、乙種幹部候補生の6人が群長、16歳から17歳の少年戦車兵2名、1小隊4名、合計6小隊24名で構成され、3か月の訓練の仕上げは夜間の宮島までの往復で終了。1945年7月20日に広島を出発し、鹿児島島の谷山漁港に赴任したのである。

特攻艇は大阪の日立造船桜島工場で建造。10月に完成すると言われたが、部隊にはラジオもなく、武器は隊長が持つ軍刀7本だけ。隊員には小銃も帯剣もなく軍服だけの状態で最前線に送られたわけである。8月に入ると昼間はグラマンの攻撃が激しくなり、我々は逃げ回るだけだった。部落の人々も昼間は郊外の森に隠れ、夜に帰宅する生活だったが、突然のようにグラマンの攻撃が無くなり、対岸の桜島の噴煙を見ながら「今日は静かだねー」と話していた。ラジオがないから玉音放送も終戦も知らなかった。18日になって新聞記者が「日本の敗戦」を知らせてきて初めて判ったわけである。

西郷さんとともに戦い、賊軍と言われた祖父を先祖に持つ部落の人たちの振る舞いは見事なものであつた。まずモンペを脱ぎ、晴れ着に着替え、我々若い兵隊には美しい女優が載っているグラビヤ雑誌の「スクリーン」10冊を差し入れ、シューマンのトロイメライのレコードと一緒に届けられた。そのメロディに癒されるであろうと洞察した人たちの知識の奥深さ、文化の高さは見事なもので、いまでも尊敬している。

追記

広島から鹿児島への隊の移動に戦隊長は同行しなかった。そして7月が終わる頃に、新婚の奥さんを連れて赴任してきたので隊員一同は吃驚した。また8月5日か6日に、小隊長と群長を集めて「ソ連が参戦したら日本は危ない」と語ったのを覚えている。この出来事から、戦隊長は同期の士官同士で戦況について情報交換していて、ソ連の参戦と戦争終結が近いのが判っていて結婚をしたのだと考えるようになった。

このように軍の中堅層の情報判断の的確さに比べて「ポツダム宣言を相手にせず」と宣言し、米英の提案を退け、昭和天皇の提案に従いソ連との平和交渉を進めて、原爆投下とソ連の参戦を招いた敗戦時の鈴木貫太郎内閣の情報不足は万死に値すると思っている。

さらに述べれば、ルーズベルト大統領は日本の降伏を早めるために、ヤルタ会談でチャーチルに内緒でスターリンと会談して対日参戦を促した。しかし、ルーズベルトの死後に、トルーマンとチャーチルは戦後の極東にソ連の進出を恐れ、日本の早期降伏の条件について話し合うため、スイスのベルンでO S S (C I Aの前身) アレン・ダレス長官とベルリン駐在武官だった藤村海軍大佐、大阪商船の津山ハンブルグ駐在員の三者会談が持たれたのである。

その会談の内容は、鈴木内閣に通知されたが、内閣は「謀略だ」と却下。日露戦争の敗戦で口惜しい思いをしているソ連を相手に平和交渉を続けた日本政府の無能さは残念というほかない。

+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

緑爽会会報へのレスポンスがありました！

渡邊 貞信

11月初め、普段こちらからメールすることの多いJAC事務局からメールが届いた。その内容は、一般の方から「緑爽会会報 第169号」に掲載されている記事「岡野金次郎ファミリーの探求」についてお聞きしたい旨、連絡が有ったとのこと。

連絡の主がどのような方かは分からず、昨今の個人情報保護の観点から相手方の電話番号とお名前のみ伝えられた。お名前が「よしひろまさのぶ」とおっしゃる方で、名前が二つ続いているようで勿論心当たりは無い。会報原稿内容に何か間違いが有ったのか？それとも関連して何か貴重なご意見が頂けるのか？いろいろ頭をよぎったが先ず電話することにした。

その方は保土ヶ谷在住で、直接“山”には関係なく、地元で郷土の歴史を調査しておられる方であった。ネットサーフィンしていて緑爽会の会報バックナンバーからこの記事を見付けたらしい。

電話した時の話では既に岡野金次郎のお墓の有る遍照寺にお墓参りされていて、なんと墓碑にある戒名「岳祖金翁居士」をご覧になっているではないか！ということで一度お会いすることになり11月末に武蔵小杉でお会いました。

後にもう一人同席させて欲しい旨連絡があり、保土ヶ谷在住の戸塚高校、地歴公民科の教諭が加わり3人でお話した。

ご存知の如く、保土ヶ谷を語る時に保土ヶ谷の地で代々金物を扱う豪商の岡野家の存在なしには語れない。今回お会いしたお二人、吉弘正信氏と加藤敬氏は後世に残す資料が少ない為、特に、保土ヶ谷の多大なる発展に寄与した岡野家本家の、岡野新田開発を行なった十代勘四郎良親、十一代勘四郎良哉及び十二代で篤志家、欣之助善哉を主体に調査されてきたようである。

一方、私の方は本家から分家した八代岡野忠兵衛定春以降の岡野金次郎にフォーカスして調査してきたので、お互いに未調査部分の情報交換の場になり有意義であった。

聞けば、今回のお話しで本家の子孫が所蔵する資料や蔵書は2017年に横浜市開港資料館に寄贈されたとの情報をいただいたので、今後、訪問調査したい。

緑爽会の会報が思わぬ方に読まれていることに驚いたが、会報発行を継続していくことの意義を痛感した次第である。また、今後共岡野家のルーツ探求を続け、より充実したものにすべく努力しようと思っている。

～～《予告など》～～

1月初詣山行「高尾山八十八大師巡り—その2 結願」

日時：2022年1月7日（金）

集合：JR 高尾駅北口に9時

行程：高尾駅北口→落合→金毘羅台→1号路→薬王院→高尾山頂→3号路・1号路で下山

歩行時間：休憩込み約5時間

八十八大師巡りで回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。もちろん、前回参加できなかった方もご参加いただけます。運が良ければ、氷の花シモバシラが見ら

れるかもしれません。なお、以下の通りケーブル利用でも参加いただけます。（上り下りとも利用可）

※ケーブル利用の場合は、合流場所・時間を「ケーブル山上駅を出た広場・11時」とします。

まだ初詣の人出があるものと思いますが、遅くとも10時45分発に乗車してください。（新年の運行時刻はまだ確定していません）寒いかもしれませんが売店もあり、「天狗焼」を召し上げるのも良いかと思います。もしも合流できなかった時は下記のCLかSLの携帯にご連絡ください。

担当：CL 荒井正人 SL 小林敏博

装備：一般日帰り登山装備（防寒対策を）直前に降雪があった場合、念のため軽アイゼン要。

申込：1月3日（月）までに荒井へ

※降雪直後や当日の天気予報が思わしくない時は実施可否を決定の上、連絡を入れます。

※申込締め切りは3日です。計画書提出の関係があるので早めにご連絡願います。

2月行事 芳賀さんのお話を聞く会

テーマ：「私と日本山岳会」

昨年6月開催予定から延期となっているものです。以下の条件がクリアできて開催となったときは、時間的にタイトになるかもしれませんが、メール・ファックス・電話でお知らせいたします。

- ・コロナの状況にもよるが、芳賀さんがアルパイン・スケッチクラブの「山好きの山の絵展」（2022.2.20～26）に合わせて東京に来られること
- ・ルーム以外での会場が確保できること

3月山行：千駄ヶ谷富士と文京区内富士塚巡り

往時の姿を残す富士塚として都内最古といわれる千駄ヶ谷富士と文京区内の富士塚を巡ります。

日時：2022年3月18日（金）

集合：JR千駄ヶ谷駅改札口に10時

行程：千駄ヶ谷駅→千駄ヶ谷富士→千駄ヶ谷駅⇒（JR市ヶ谷駅で東京メトロ有楽町線に乗り換え）⇒護国寺駅→音羽富士→小石川植物園（昼食）→白山富士→海蔵寺（食行身禄の供養所）→駒込富士→駒込駅 歩行時間：休憩込み約5時間

※富士塚を登拝される方は、滑らない靴でご参加ください。

※費用：ご自宅から集合場所・解散場所からご自宅への交通費以外にJR市ヶ谷駅⇒東京メトロ護国寺駅310円、小石川植物園入場料500円、計810円が必要です。

担当：小林敏博

申込：3月14日（月）までに小林へ



--- 編集後記 ---

10月以降全ての会の行事ができたこともあり、報告事項と投稿で20ページとなりました。今後の山行なども実施されて充実した会報となるよう努めていきたいと思います。深田久弥没後50年に因んだ講演会が出来て良かったと思っています。紙面の都合で全部を伝えきれませんので、次号にも掲載することを予定しています。（荒井正人）

先日、山梨へ向かう中央線から奥多摩の山々の冠雪を見ることができました。近郊の山も冬景色の装いとなりうきうきした気分になりましたが、収まっているコロナ禍は新たな株が日本でも見つかかり心配の種がまた増えそうです。今の状態が続いて会の行事が引き続き無事に実施できるよう願っています。（小林敏博）

※講演会には出られなかったが資料が欲しい、という方は荒井までご連絡を。追ってお送りします。

次号予告2022年2月25日発行の主な内容

1月初詣山行報告、投稿など 皆様からの投稿をお待ちしています。「ようこそルームへ」もよろしく！